

背徳のメス

黒岩重吾



masa

はいとく
背徳のメス



定価はカバーに表
示してあります。

新潮文庫 草 148 C

昭和四十七年十二月二十日 発行
昭和四十八年五月二十日 二刷

著 者
黒 岩 重 吾
くろ いわ じゅうご

発 行 者
佐 藤 亮 一
さとう りょういち

発 行 所
株式 新 潮 社
会社

郵便 番 号 一六二
東京 都 新宿 区 矢来 町 七 一
電 話 東 京 (〇三) 三六〇 一一一
振 替 東 京 八 〇 八 番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新潮文庫

背徳のメス

黒岩重吾著



新潮社版

2098

背徳のメス

宝石の肌はだと黒曜石

一

ホテル有明は、大阪阿倍野あべのの繁華街のはずれにあった。場末の連れ込みホテルではあるが、部屋にはバスもトイレもあった。

植うゑはそんななじみのホテルを、阿倍野だけで三軒持っていた。それぞれ違った女を連れ込むためである。

が、彼の場合、三軒でも十分というほどではなかった。

阿倍野病院、産婦人科の医師、植秀人ひでとは、ここ数年憑つかれたように女をあさって来た。女だけが、彼の人生の足跡であった。

植が阿倍野のホテルをよく利用したのは、病院に近いからである。彼は当直の晩、ひそかに抜け出では、看護婦たちとこれらのホテルで、短い情事を楽しんだ。植は己おのれの人生に対し、ここ数年驚くほど図太くふるまってきた。

今宵こんやも植は、看護婦の有吉妙子と、有明の一室にいた。この四月、他の病院の看護婦養成所を

出、ようやく看護婦になったばかりの妙子は、ベッドに腹這いになり、枕元にならべられた秘密写真を眺めていた。写真は、植が持参したものである。

昼の女猫のように眼を細め、素肌のまま、恥ずかしげもなく写真に見入っている、この十九歳のビート族は、ベッドの上で、三十五歳の彼と対等に格闘した。

性への羞恥心を過去のものとした、現代の風俗の海を、妙子は、髪の手先から足の指先まで、のびのびと泳いでいるようだった。

妙子の鼻は高くはなく、唇も締りはなかったが、白いなめし皮のような肌は、この年にしては凄艶なほどしなやかだった。

植が妙子と関係したのは、その肌のためである。それは別れた妻真理子と似ていたようだ。

植は室内の温気に濡れた、ガラス窓に滲む場末のネオンの灯を、情事が終わったあとの、気だるい眼で眺めた。

その灯の傍に、さっきホテルに入った時にはいなかった街娼が、寒そうに肩をすくめて立っていた。それが彼に、病院を脱け出して来てからの、時間を思い起させたようだ。彼は当直だった。植はホテルの備品の、安っぽいガウンを、だらしなくはおったまま、ベッドに腰を下ろし、受話器を耳に当てた。妙子は身動きもせず写真に見入っている。

受話器に、今のところ急患がない旨を伝える、産婦人科婦長、佐藤信子の声がもの静かに流れて来た。

「でも先生、もう十二月ですし、いつ患者が来るかも分りません。早く戻って下さい」

「うん、すぐ戻るよ、寒いから運動をしていてね」

と植はおかしさをこらえながら言った。信子は答えなかった。

まさかホテルから電話を掛けているとは知るまい。顔半分を蔽^{おほ}うマスクをした信子が、詰所で一人本を読んでいる姿が脳裡^{のうり}に浮び、植は苦笑した。

三十三歳の信子は独身であつた。

植は受話器を置くと、妙子の髪に手をやった。妙子はゆっくり仰向き、植の首に両手を掛けて来た。

明るい螢光燈^{けいこうとう}の下で、妙子は全裸であつた。無毛に近い脇下^{わきした}は、汗でしめり、鼻孔を寄せると、乳を吸った赤子の唇のような匂^{にお}いがする。その体臭と、肌のしなやかさが、妙子の宝石であつた。

「急患あつたの？」

と妙子は尋ねた。それはやはり看護婦の言葉であつた。妙子の両腕をはずすと、植は服を着始めた。

「うち、もうちょっと、おりたいな」

と妙子は、あくびをしながら言った。

「おりたければおれよ。その代り、その分の部屋代は、君が払うんだな」

「阿呆^{あほう}らし」

と妙子は言つて、バネに撥ね^はねられたように勢いよく起き上つた。妙子はファンキー調のジャズを口ずさんでいた。

これからミナミのダンスホール・ユニバースに踊りに行く、という妙子と、植は阿倍野の交叉点で別れた。

スラックスの上のダスターコートを、冬の夜風になびかせ、足早に去る妙子の姿には、情事の疲れは、みじんもなかった。

植は暫く、感嘆して、その後ろ姿を見送っていた。かりにもう一年、妙子と関係が続けておれば、妙子は植を鼻であしらいそうであった。

が、そんな思いは、苦笑だけで済まされないものを、植に感じさせた。

今日から十二月になった。暖冬と言っても十二月の夜風は冷たかった。

天王寺公園の黒い樹影が木枯しになびき、通天閣の水色のネオンが、街路樹の枯れた枝にところどころ切断されていた。

師走という月が、通行人の足を早めていた。金策に奔走する人、家庭に急ぐ人、苦しみであれ、幸せであれ、人々の大半は、なにかの目的を持っていたようだ。

だが植には、その目的がない。飢餓のように女を漁っても、それは感覚の表皮を搔く、木製の孫の手でしかなかった。生への意志とは何ら関係なかった。

阿倍野病院は、古びた木造の三階建であった。病棟の窓ガラスは、いくら拭いても、すすけたようにくもっていた。廊下はところどころひび割れ、待合室の椅子のレザーは醜く裂け、色違いの太い糸で縫ってあった。

患者のほとんどは、医療保護の長期患者であった。昔、阿倍野病院は、行路病者を収容する施

療院に近かった。現在キリスト教団の資金で運営され、内科、外科、産婦人科、と一応体裁は整っているが、患者の質は相変らず悪かった。が、それと同程度に医者の方も落ちていた。

植が産婦人科の詰所に戻ったのは、八時半である。ちょうど一時間半外出していたわけだ。

白衣をつけ、想像通りマスクをかけた婦長の佐藤信子は、一人トルストイの『クロイツェル・ソナタ』を読みふけていた。入って来た植を見ると、顔を上げたが、お帰りとも言わず、すぐに視線を落した。

明るい灯の下で、青く湿ったような信子の顔は、冷やかに植の存在を無視していた。

信子の勤務は六時までであった。が、勤務が終っても、信子は相変らず白衣のまま、詰所で本を読んだ。習性と言ってよいほど、きまりきった姿だった。マスクもめったにはずさない。それは潔癖さというより、もっと深い生理の奥から来ているようであった。

信子は、外出もめったにしなかった。病院で眠り、病院で働き、そして病院で新聞と本を読む。それが今の信子の人生であった。

植はガスコンロの上の消毒器を下ろし、やかんをかけ、火をつけた。

中庭に面した窓ガラスに、植の上半身がくっきり映っていた。身長は五尺四寸、高くはないが、がっしりした身体に、浅黒い彫りの深い顔が乗っている。少し窪んだ眼のあたりに漂う陰気な翳も、太い鉛色の眼鏡によって消されていた。

植は、窓ガラスなどに自分の顔を、時々ぼんやり眺めることがあった。

「ほう、先生自分にみとれてはるわ」

と看護婦は、そんな植をからかうことがある。だが植のそんな癖は、妻の真理子と別れてから起きたようだ。

夜の検温を終えた、看護婦の大場綾子^{あやこ}が詰所に戻って来た。

植を見た綾子の眼に、明るい色が流れた。詰所に婦長だけではなく、植がいたことに綾子はほっとしたようだ。どの看護婦も婦長と二人きりになることをいやがった。信子はそんな冷たい雰囲気^{いき}を持っていた。それに、関係するまで植は、どの女に対しても、明るく朗らかに接した。女たらしと知りながら、大半の看護婦は植に好意を抱^{いだ}いていた。

「今、お帰りか、事故はなかった？」

と植は尋ねた。

「はい、たいしたことはありません。ただ、百十七号の西岡さんが、腹痛を訴えています」と綾子は、はきはきした口調で言った。

「西岡、ああ一週間前手術した外妊娠か。熱は？」

「七度二分です」

「大丈夫だろう、痛み止めでもあげ給え」

「はい」

綾子は薬棚^{くすりだな}から、薬包紙に包んだ薬を出すと、すぐ詰所から出ていった。五尺三寸、十四貫ぐらいか。白衣の下^{ちぶさ}の乳房^{ちぶさ}も臀部^{でんぶ}のふくらみも、若いエネルギーをはち切れそうに発散させている。植は、今ごろ、ダンスホール・ユニバースで、おそらくちんぴらがかかった若者と、手を振り足を

振り、ジルバを踊っているに違いない、妙子の姿を思い浮べた。

植は煙草に火をつけながら、妙子とも、もうそろそろ別れねばならないな、と思った。

妙子との関係はすでに半年続いていた。それは彼の女関係にとっては、ひどく長い方であった。植はふと妙な予感に襲われて、背広の内ポケットの財布を取り出した。昨日アルバイトをしている産婦人科の医院で一万円貰った。

さつきホテル代に六百円出したから、まだ九千円残っているはずだった。が、予感通り、いくら数えても、千円札は八枚しかなかった。

同じようなことは、半年前にもあった。それは、妙子を初めて連れ込んだ時のことである。妙子はすでに処女ではなく、ベッドに倒しても抵抗はしなかった。が、彼と一緒にバスに入ることには拒否した。いくらドライだと言っても十九歳の少女である。羞恥心が残っているのだろう、と植は善意に解釈した。彼は一人でバスにつかった。その翌日植は千円不足していることを発見したのだ。その時は妙子が盗んだ、とは考えなかった。が、妙子とホテルに行った後、植は必ず財布を調べた。そして今夜、最初と同じことが起きたのである。

植は財布をポケットにしまうと、煙草の煙を輪にして吐いた。いつもは見事な輪になる煙は醜く崩れ、煙の波になって消えていった。

植の顔はひどく老人臭かった。

「そんな難かしい本を、あきずによく読むな、二十代ならともかく、実際感心するよ」

と植は信子に言った。信子は返事をしなかった。本を読んでいる時話しかけられても、信子は、

めったに返事をしない。

「昨日まではドストエフスキーだったな」

と植は独り言の^{ひとごと}ように言った。信子は本から眼を離し、植を見た。

「植先生、どうして科長さんを助けてあげないんです？」

信子の細い眼は、ひどく光って見えた。植は眉を^{まゆ}ひそめた。信子が安井事件を知っていたことは意外であった。

「科長が婦長に喋^{しゃべ}ったの？」

「いいえ、でも私には、はっきり分るのです。先生が、科長さんが正しい、と証言さえしたら、問題はないのです。安井がつけ上って、ゆずるのは、先生がいまいな態度を取っているからです」

奇妙な微笑が植の顔に浮んで消えたようだ。

「な婦長、僕は病院のすべての者から色ドンと軽蔑^{けいべつ}されている。それによ、学位もない、臨時医専出だ。そのくせ給料には一人前文句を言うし、アルバイトはやる、当直の晩は抜け出る。全く病院にとっては、有難くない先生だろうよ。だがな、それでも、この病院じゃ、まー、まともな人間だと思っているんだぜ。分らないだろうな、僕の言葉が……」

「もちろん分りませんわ。とくに、先生がなぜ、あんな人間のかすのような安井に味方して、学問的にも社会的にも立派な科長さんを^{おとし}陥れようとしているのか、私には分りません」

「僕が科長を陥れようとしているって」

続けようとして植は口を閉じた。結果的に見れば、確かにそう取られても仕方なかった。科長の西沢は、旧帝国大学出身で、肥満した身体に口髭くちひげをはやし、身体の隅々すみずみにまで、昔の博士意識を充満させている男だった。

信子はそんな西沢を尊敬しているのである。いくら自分の気持を説明しても、しよせん植とは無縁の存在であった。

「なー婦長、これだけは言っておくが、僕は生れてから人を陥れようと思ったことは一度もない。だがな、僕が僕の信ずる道を歩んで、そのためほかの奴らやつらが傷つこうと、それは僕の知ったことじゃないよ」

「まー、無頼漢のような言い方……」

事実、信子の細い眼の奥には、本当に無頼漢を見るように、嫌悪けんおと軽蔑がねとついていた。

二

その女、安井光子が、搔爬そうはのため、阿倍野病院をおとずれたのは、一週間前であった。

まだ二十になるかならないか、陰気なほっそりした女だった。

派手な化繊のツーピースの下には、真赤なシミーズを着ていた。明らかにこの近くの、飲屋か、安サロンの女であった。街娼がいしょうかもしれない。

診察したのは植であった。妊娠三カ月であるが、その子宮は十六、七歳の少女のように小さかった。植は一応その日は拡張器で子宮を拡げひろ、明日手術するのが適当だと判断した。手術はたい

てい科長の西沢がすることになっているので、植は患者を待たせ、その旨を西沢に伝えた。

「今日は手術せず、一応拡げておいた方がよいと思いますが」

「どんな患者だ？」

と西沢は尋ねた。この病院に来るのは、たいてい質の悪い患者であつた。西沢の間は、裕福な上等な患者であるかどうか、ということであつたようだ。

西沢は患者によつて、はっきり態度を変えた。彼はこのような貧民病院に勤務していることを恥辱と考えていた。

植も西沢の気持が、理解できないこともない。臨時医専出の植でさえ、病院に出るのがいやになることがあつた。

が、植は患者の階級によつて、診察の態度を変えたことはなかつた。それだけが彼の誇りである。

植は答えなかつた。西沢は植の気持を敏感に読みとつた。生意氣な、と西沢は思ったに違いない。

「今日しよう、明日はいそがしい」

と西沢は言った。植は不服そうな色を浮べて突っ立っていた。

「わしは今まで、数千人の手術をして来た。ただの一度も失敗したことはない」
と西沢は言つて、その言葉を確認するようにうなずいた。

「後学のためだ、植君、立ち会い給え」

搔爬の手術に立ち会えというのは、明らかに植への侮辱であった。

手術は、信子と植の立会いで、四時から始められた。

クスコで腔を開き、子宮ゾンデで深さをはかった時、西沢の眉が寄ったのを、植は見逃さなかった。

痛快に思うより、植は、西沢が手術を翌日に延ばすことを期待した。

が、西沢は延ばさなかった。頑丈な毛の生えた西沢の手には、キューレットが握られていた。

西沢はさすがに慎重だった。時々、西沢は内部の状態と、自分の技術の正確さを、植に伝えた。

患者は、眉をしかめるだけで、うめき声ひとつたてなかった。顔立ちは整っていたが、その肌は黒く、陰気な表情に似てかさかさしていた。

手術は三十分かった。西沢にしては、長い方であった。最後の消毒を終えた時、かなり血が流れて来た。それは手術後の出血にしては、明らかに多量であった。

西沢はすぐ出血場所を探した。原因が分ったのか、分らないのか、

「たいしたことはない」

と呟いた。西沢の顔には、不安そうな色はみじんも浮んでいなかった。

血がとまらないのが、植には不安だった。彼は西沢の不快さを買うのを覚悟して言った。

「出血がどうも多いようですね」

「発育不全の場合は往々あることだ。心配はいらない。今日は帰さず一晩とめるように」

搔爬の手術で、一晩入院させるということ自体、西沢にも不安はあったに違いなかった。